

Departure English Expression I

私の授業イメージ —ディクトグロスに焦点を当てて—

新谷 明義



私が勤務する岡山県立倉敷南高等学校は、平成18～20年度の3年間 SELHi の指定を受け、英語 I・II の授業改善に焦点を当て研究開発を実施した。その際、言語活動の中心に据えたのがディクトグロスであった。詳細については、本校ホームページにアップしている『平成20年度 SELHi 研究開発実施報告書』をご覧ください。

ディクトグロスの活動を念頭において、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連づけて指導する」ことが可能となっているかという観点から、『Departure 英語表現 I』の第1課 “Our School Year Starts” を例にとって、1レッスン2時間の授業展開を考えてみたい。

◆1 時限目の流れ

○Introduction：ターゲットとなる文構造・文型、文法項目の提示・確認 (input → intake)

Kazuaki : Hi, I am Suzuki Kazuaki. In spring cherry trees bloom beautifully, and our school year starts. There are about 840 students at our school, and everything looks different and new. I feel a little nervous. Today we have a health check in the morning and club meetings after school. I like tennis, so I hope to join the tennis club. In my English class I have to introduce myself. What shall I say?

「動機付け」として、「理解可能なインプット」となる Introduction (モデル英文) で生徒の興味

を刺激するため、4技能の基盤である音読指導をしっかり行いたい。鈴木 (2009) が指摘するように「音読」こそがすべての基本である。Introduction にはそのレッスンで学習する文法事項 (Expressions) が盛り込まれているので、「音読」によって「動機付け」を十分行うことが、そのレッスンの成否の鍵を握っていることは論を俟たないであろう。「動機付け」がしっかりなされていれば、各レッスンの最終目標であるアウトプットの Speak Up にスムーズにつながっていく。

英語の授業の場合、各レッスンの導入がまさしく「学習場面での成功あるいは失敗を決定づける際にきわめて重要な役割を果たしている」と言えよう。音読指導については、安木 (2009) (2011) が参考になる。リスン・アンド・リピート、オーバーラッピング、シャドーイング、クローズ音読等があるが、東谷 (2009) が提唱する暗唱・暗写は自己表現活動に向けた非常に有効な手段である。さらに、音読後の発展活動として、ディクトグロスを活用することにより、トピックやキーワードの説明→スキーマの活性化、メモ、復元、比較の流れの中で、文構造、文法に関して「意味のやりとり」「気づき」が生じる。

○Expressions：Introduction でインテイクした文構造・文型や文法項目の確認 (noticing → comprehension)

○Give It a Try「絵の状況を適切な英語で表現」：文構造・文型や文法項目の定着 (intake)

リード・アンド・ルックアップを行い、リテンションを高めたい。また、ペアによる意味の確認、リピート、サイト・トランスレーション、ロ

ールプレイによるダイアログの練習等を行い、実際のコミュニケーション活動に近づけたい。

○Get Ready to Express Yourself

①「並べ替え」：語句整序 (integration → output)

②「空所補充，日本語→英語」：語句→文 (〃) 文字通り，自己表現活動の準備であるが，語句整序→文とステップアップした活動を行い，スムーズに自己表現活動へとつなげたい。

○Challenge! 「場面を設定した自己表現」 (integration → output) ペアで伝え合う→グループ内で発表→クラスで発表につなげる活動をした。この活動をさらに広げて，タスクを課した言語活動を導入して，より効果的に，ターゲットとなる文構造・文型，文法項目の定着を図ることも可能である。

◆2 時限目の流れ

○Get More Informed 「写真を見て英文完成」 (output) ここまでで文構造や文法項目の確認・定着，自己表現の活動を行っているが，Get More Informed はパラグラフ・ライティングにつなげる活動 (input → intake) である。ここで，最終のパラグラフ・ライティングの活動につなげるために，ディクトグロス活動を行うと，文構造や文法項目の再確認ができ，定着をさらに深いものにすることができる。

○Listen Up 「音声聞いて表を完成」 (input → intake) 「聞く」力の育成を目標としたものであるが，少し負荷を高めて，ディクトグロス活動を行い，聞いたものを復元する活動にすることもできる。

○Write on Your Own

① Get Ready to Write 「英語で表現する準備」：センテンス・ライティング (output)

② Write a Paragraph 「50語 (最終課では100語) 程度の英語で表現」：パラグラフ・ライティング (integration → output)

センテンス・ライティング→パラグラフ・ライ

ティングと，指示に従って1パラグラフが書ける構成になっているが，②において，生徒が書いたものをディクトグロスの素材にすることも可能である。その際には，聞いたものをそのまま復元させるのではなく，サマリーを書かせることも考えられる。また，数レッスン毎に，生徒のスク립トを活用して，例えば各グループに違ったテーマのエッセイを書かせ，クラス全体で発表し合い，ディクトグロスにつなげることも可能である。

○Speak Up 「ペアで対話」 (integration → output) 最終的な口頭による発表である。ペアで伝え合う→グループ内で発表→クラスで発表と対象を広げ，「書いてから話す」という指導で，最終的には「文法がコミュニケーションを支えている」ことを実感させる言語活動にしたい。

*

『Departure 英語表現 I』は，各レッスンが「読む」力・「聞く」力・「書く」力を「話す」力につなげる構成になっている。村野井 (2009) が指摘しているように，「インプット理解を助けるわかりやすい提示，内容の深い理解，言語知識を定着させるための練習」がそれぞれ効果的に行われ，アウトプット能力を育成できるであろう。また，センテンス→パラグラフ，ライティング→スピーキングという構成になっており，インプット・インテイク・アウトプットの活動を通して，言語の形式面の獲得ができるだけでなく，コミュニケーション能力を育成できるイメージがわいてきた。「英語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに，事実や意見などを多様な観点から考察し，論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う。」という英語表現 I の目標に沿って，「文法については，コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ，言語活動と効果的に関連づけて指導する」ことが可能であると確信できた。

(にいや あきのり・岡山県立倉敷南高等学校指導教諭)